

# 想



# 随

先生の方も心得たもの（かどうか）塩茹での夏豆などを用意して下さって心おきなく差し向い、お茶を飲み飲み話しこむ。話題も幅広く世相全般、文化、教育、女のくらしなど。先生に云わせれば「折角の土曜の午後を、何とかあまじメ子ちゃんの二人だろ。熊本県の社会教育だの、県民意識だの、長時間討論会とは。私も同感だけれど、博学多才の先生を独占しての機会なればこそ、もったいとおきたい」「女のくらしさまさま」である。

## 土曜日の

### おしゃべり

#### 河上洋子

久しぶりに土曜日の午後をM先生のお宅で話しこんで来た。行けば毎度、四時間位もつきることなきおしゃべりである。表にNHK勤務、裏におかみさん業と、二足の草鞋を履きわけて、どちらも三十年の精勤とあらば、草鞋のすり切れる程に、胸の思いも溜る一方。そこでM先生宅土曜訪問ということになる。

考えると、私が生活人、職業人として生きたこの三十年は、びったり戦後の大変革の歴史と重なるのである。私の祖母の頃までは、ゆるやかに伝承された「くらし」も、意識も、この三十年間にまるまると変わってしまった。早い話が、身の回りに何と道具の増えたこと。ただ増えただけでなく、新しく、美しく、便利なものも引きかえに、旧い道具は惜しげもなく捨ててしまった。戦後は捨てる歴史でもあったのである。「今の高校生はカマドを知らないそうね」と、私はある本で読んだ話をしながら、NHK入局当時、婦人番組の目玉は「生活改善」であったことを思い出した。中でもカマド改善は村をあげての関心事であった。ところが一通り村中のカマドがピカピカに改善された途端、電気やプロパンガスが入りこみ「ハガマ」と「カマド」はあっさりお役ご免になってしまった。あいついで姿

を消したのは「タライ」と「洗濯板」だったかしら。まっ先きに捨てられたものから、「おいしい御飯炊き」や「洗濯」がどんなに長い間、女の重荷であったかを思うのである。今、手仕事のよさを、そんな苦労を知らないニューファミリーとかの若い人々が云うのをきくと「それは趣味よねえ。昔は労働そのもの、嫌でも下手でも生きて行く為の女の仕事だった」と、私は云いたくなる。とも角家の中に「もの」が増えるにつれ、面白いことには女の人が「モノ」を云うようになり、外に出るようになった。僅か三十年前「モノ」を云う女性を探し歩いた苦勞など嘘のように、朝の主婦向けテレビ番組には、自信に満ちた奥様が見られるご時世である。テレビの功罪は種々あるだろうが、何千年も閉ざされた社会に生きた女性にも平等に情報が開放された事は、やはり大きな事であると思う。問題は、この現代の変革を積極的に受けとめ、情報の活用を考え、新しい価値観を私たちが創り出すことであらうか。

「泳ぎ疲れ 肥田子臭ア子の戻り」わたしの泳ぎ習いは小学校に上るから上らない頃の夏である。嘗ての井芹川と坪井川の合流点の一寸下流に一駄橋と言って石材の橋脚が一間置きぐらいに並べて構築された古めかしい石橋があった。その橋脚に降りて行き、そこから亀泳ぎという奴で次の橋脚まで泳ぐのである。金組には相当な勇気がいったものであり、一度は掴まり損なって鱈腹水は呑んだ

## 川泳ぎ

### 島崎 作家林

どの川でもがそうである様に白川や坪井川が熊本市の動脈としての大役を担っていた時代もあったが、今ではお盆の精霊船でさえ何処かの国の鉄道のようにスリットを決め込んで行き着く処へ運んでくれなくなってしまう。でもわたしは小学生時代には尿尿を運ぶ団平船とか云ったものが肥田子を沢山並べて白川の川べりに一服しているのを見た記憶がある。いや見た記憶だけではなく、時には汚されている肥田子を洗っていた近所で腕白仲間と一緒に平気で泳ぎ回っていたものであった。

「泳ぎ疲れ 肥田子臭ア子の戻り」わたしの泳ぎ習いは小学校に上るから上らない頃の夏である。嘗ての井芹川と坪井川の合流点の一寸下流に一駄橋と言って石材の橋脚が一間置きぐらいに並べて構築された古めかしい石橋があった。その橋脚に降りて行き、そこから亀泳ぎという奴で次の橋脚まで泳ぐのである。金組には相当な勇気がいったものであり、一度は掴まり損なって鱈腹水は呑んだ

「泳ぎ疲れ 肥田子臭ア子の戻り」わたしの泳ぎ習いは小学校に上るから上らない頃の夏である。嘗ての井芹川と坪井川の合流点の一寸下流に一駄橋と言って石材の橋脚が一間置きぐらいに並べて構築された古めかしい石橋があった。その橋脚に降りて行き、そこから亀泳ぎという奴で次の橋脚まで泳ぐのである。金組には相当な勇気がいったものであり、一度は掴まり損なって鱈腹水は呑んだ

上、流されそうになり命からがら橋脚まで泳ぎ戻ったこともあった。そんなことから腕白並みに泳げる様になり、橋の上からの飛び込みまで出来る様になったものである。ところでその頃の一駄橋あたりは上流に魚市場、青果市場もあり、その汚物や下水の流れ込みなどもあり、橋から飛込んで浮いて見たら鼠の死骸が頭の上に乗っかっていたなど、環境衛生が矢

石畳の上から私の名を声をからして呼ぶのである。河童仲間が「おらん」と言っても聞入れず「そこにおる。早よ上って来い」と鎌をかけるので根負けをして波々上らざるを得なかったことだった。

縁が西日に白磁の肌を思わせる冷たさで、空の一角に輝いているのを見ていると、カルデラに沈む小さな人家との対比のせいで、現にわが身がたつ阿蘇外輪の山頂のあたりが、三十二年も前の同じ季節に出合った、大陸東北部の高原と、影のように重なってくるのである。

く、つい今まで、前線へ急ぐ輸送列車に揺られていたわたし達は、運命を等しく死の手に委ねた羊の群で、数時間前までのわたしは、それでも未練がましく、神への呪いと、死からの自由を願う気持ちにこもこも締めつけられていたのである。

「亀泳ぎ 洗礼受けた坪井川」今では見る影もなくなってしまうが、水流の関係から白川には八幡洲とか蒲鉾石とか「ゴンジャ跳ね」と呼ばれる幾尋の深みがあるところがあり、市民の絶好な川泳ぎの場所になっていたもので、熊本の誇り、小堀流もこんな処で鍛練されていたと言っても本気にする人も少なくなってしまうという当節である。

「老の一徹 河童一匹釣り上ぐる」川泳ぎでの庄巻というか無茶と言うか梅雨どきの濁流渦巻く白川を長六橋から飛込むのが流行った。下河原公園に泳ぎ着くのであるがその冷いことは一遍で唇の色を失ない、歯の根が合わぬことになる程で、駆け戻っては少しばかり生気を取り戻して又飛込んでいたものである。流されたら、溺死した人も相当聞いていたのに飛んだ英雄を気取ったものである。

わが身より高みには、もはや遮るものもない烈日のしたで、時折、キリギリスが鳴き、萩の花がこぼれ、ただ無性に暑く、そして渴き――。

輝きながらも澄みとおり、かすかに秋の気配を感じさせる、八月の東満の上空を、やがて爆音をひいて、友軍の連絡機が一機だけ、北西から東南の山の稜線の彼方へ消えて行ったのを覚えていた。

「時の流れ ふる里持たん小堀流」肥田子積み団平船がもよっていたのは「ゴンジャ跳ね」の近くで、暑い盛りにはその洲に数十名の河童連中が結構泳ぎを楽しんでいたものである。一度は溺れようとしている女の人を助けようとしてしがみつかれて危く抱合い心中をやらかそうとして命拾いしたこともあった。

「盲ら蛇 ヤングにアえすかもん」無ア（肥後狂句連盟会長）

## 八月の空

### 大澤 昭

積乱雲の三角形の底辺が、もう暗い灰色に濃みはじめて、大きくひろがっているそのあたり、気流は大分から宮崎方面にかけて、海岸線から激しく上空に向かっているのだらう。

動を胎みつつも、そのもりあがった上

火焔ビンか爆雷を抱えて、戦車の砲火の死角を、どうしたら有効に近づいて行けるかと訓練されてきて、選択の暇もな

母が私かに服に忍ばせてくれた金で求めたそのパンは、さしあたり、何としても、母や弟達が待っているであろう大連のまちなかの、アパートの一室に辿りつくまでの食糧である筈だった。そして、アパートの一室から故国までの道のりは、なお遙かに遠かった。